

商船学科における国際インターンシップの取り組み

村上 知弘* 中田 海斗** 南雲 侑季**

Approach in International Internship Program for Department of Maritime Technology

Tomohiro MURAKAMI*, Kaito NAKATA**, Yuki NAGUMO**

Abstract

The students of four maritime colleges (Toyama, Toba, Hiroshima, Yuge) did the international internship on the Kauai island and the Hawaii island in Hawaii. The international internship program is a 3 week experiential learning program that focuses on learning the traditional of Hawaiian and navigations as well as voyaging canoes of Polynesia. During the first 2 weeks, the participating students learn English, Hawaiian culture and navigation at KCC, and apply those knowledge when they join the state-wide crew training for voyaging canoes that annually takes place on the Big island of Hawaii. The following was learnt from this training. An English not only importance but also reconfirmation of the safety of the sea and the ship was able to be learnt.

1. はじめに

弓削・富山・鳥羽・広島の高専の商船学科の学生 11 名が、平成 25 年 3 月に 3 週間にわたり、ハワイ諸島のカウアイ島及びハワイ島で国際インターンシップを行った。同プログラムは、はじめの 2 週間がカウアイ島にあるカウアイ・コミュニティ・カレッジ(KCC)において、英語はもちろんのこと、ハワイ語、フラ、タロイモなどハワイ文化をはじめ、現代的航海計器を使用しない航海学や古代式航海カヌー「ナマホエ」の建造などハワイや海に関するプログラムを行う。特に本プログラムは、座学ばかりでなく、実際に海で行うライフサバーによるオーシャントレーニングや参加学生による英語でのプレゼンテーションなど参加者自ら行動するプログラムを多く取り入れている。また、カウアイ島でのプログラムを終えると、ハワイ島に移動し、ハワイ大学のヒロ校イミロア天文センターで行われている航海カヌーのクルートレーニングに合流して、3泊4日の合同クループログラムを行った。宿泊は、カウアイ島ではホテルであったが、夕食は当番制を取り、全員で作成し、共同で行う作業として、これもプログラムの一つである。ハワイ島では、屋外において寝袋で泊まるなど、1日中すべてが研修という形とな

っている。参加者達は、プログラムの間非常に密な時間を過ごした。最終日には、ホノルルへ行き、「えひめ丸」の慰霊碑を見学して、海の安全航行を再確認して帰国した。

また、本プログラムを行う前に、事前にインターネット会議形式で、顔を合わせての研修を行った。さらに研修後には、今後参加が見込まれる低学年を対象とした報告会を行い、自分たちが行った研修のまとめと来年度の参加者の募集も行った。

本校としては、はじめての参加となったが、事前研修でインターネット研修や英語研修を行ったため、スムーズにプログラムに入っていくことができた。本プログラムに参加して、英語を学ぶだけでなく、商船学科の学生として、今後国際社会でも活躍できる人材を育てる意味でも、言葉や習慣という海外文化への関心及び周りとの協調性そして、海的美しさと怖さと学んだ。そして最後に今後の商船学科の国際インターンシップや英語の研修についても述べる。

2. 背景

2011年11月にKCCと商船学科を有する富山・鳥羽・広島・大島・弓削の5つの高専ととの間に包括協定が結ばれた。その前年に富山高専とKCC

* 商船学科
** 商船学科4年

との間では、協約書が結ばれており、2010年3月に初めて富山高専はKCCでインターンシップを行った。当初富山高専のみでスタートしたプログラムであったが、翌年には鳥羽商船高専も参加した。そして今年度から弓削商船高専と広島商船高専も参加する形となり、4校での合同インターンシップとなった。大島商船高専は、KCCと独自でプログラムを組んでおり、毎年独自のプログラムを行っているため、本プログラムには参加していない。

3. インターンシッププログラム

3.1 事前研修

3月のハワイでのインターンシップに先立ち、1月から5回にわたりインターネット回線を通じて、事前研修を行った。各校に設置されているパソコンから、相互に接続してインターネット会議の形式で研修を行った。毎週水曜日の16:00から約1時間30分程度行った。本来、インターネット会議設備はLL教室に設置されていたが、参加学生2名と教員1名の3名だけだったため、村上研究室で行った。事前研修は、7時間目の講義と10分重なっていたが、他校との同時スタートのため、当該教員の了承を得て、講義を10分前に早退し、本研修に参加した。

はじめに、本プログラムの責任者である富山高専の保前先生から、スケジュールや概要の説明がなされた。2回目以降、各校の参加者の英語による自己紹介や現地でのプレゼンテーションのテーマなどを話し合った。

この時、前年度参加した学生が今年もリーダーとして参加し、本事前研修もそのリーダー学生によって話し合いが進められた。この前年度参加した学生のリーダーがいることは、現地のプログラムでも大いに有益であった。学生全員が初めてではなく、一人でもプログラムを知っている学生がいることで、学生からの主体的な動きが可能になっている。

さらに事前講習では、鳥羽商船高専の瀬戸先生による天文航法の概説などもあり、ハワイで習うことを事前に日本語で勉強しておくことによって、現地で英語での説明を受けたときの手助けになった。そして回を重ねるごとに、学生同士が親密になり、お互いに連絡先を教えることによって、「LINE」などで繋がり、ハワイへ出発する為に空港に集合したときには、すでに初めて会った気のしない仲間となっていた。



図1 インターネット事前研修

本プログラムとは別に、本校商船学科学生を対象した英会話セミナーも開催した。本プログラムに参加した筆者達も出国直前のときであったが、英語になれるために参加した。同セミナーは、海事人材育成プロジェクトの一つとして開催された。同セミナーはネイティブ教員5名によって行われた。通常の授業でもネイティブ教員の英語はあるものの、クラスに1名の講義方式に比べ、少人数制で行われた同セミナーは、外国人になれるという効果もあり、直前の参加は有意義であった。

3.2 KCCでのプログラム

本プログラムの最初の2週間は、カウアイ島にあるカウアイ・コミュニティ・カレッジ(KCC)で行われた。ここでは、英語はもちろんのこと、古代航海学やフラ、タロイモ、ハワイ語などのハワイ文化について学んだ。古代双胴カヌー「ナマホエ」の建造にも携わった。実際の建造に携わることによって、古代の航海がどのように行われたかを想像する助けとなった。また、フラはKCCの学生用の講義に入って参加した。KCCの学生達は、上手に踊っており、講師の先生だけでなく、KCCの学生からも踊りを教えてもらい、交流を深めた。タロイモの講義では、タロイモの田んぼに入り、作業を行ったり、タロイモ(カロ)の神話を勉強したりした。その神話は、「遠い昔、空の神ワケアと、陸の神パパの間に産まれた子は死産でした。夫婦が哀しみのうちに亡骸を土中に埋めると、やがてそこから芽が出てカロとなった」。このようにハワイの人々にとって、タロイモは精神的にも重要な位置づけにあり、大切なものであることなど学んだ。さらにハワイ語の講義は、KCCの学生が、英語と対比して講義を行い、その後の挨拶のコミュニケーションなど、ハワイ語を学ぶことによって、互いのコミュニケーションに大いに役立った。

商船学科における国際インターンシップの取り組み（村上・中田・南雲）

また、近くのビーチでライフセーバーによるオーシャントレーニングとしてサバイバルも行った。ゆっくり体力を消耗しない泳ぎ方や長く浮くための技術など、より実践的な海でのトレーニングも行った。

さらに、伝統的なハワイ語で教育している幼稚園に行き、英語でなくハワイ語でハワイ文化を教えている様子を見たり、その子ども達と遊んだりして文化交流も行った。

一方、事前研修から行ってきたそれぞれの英語によるプレゼンテーションの準備も現地で最終的に行った。参加学生それぞれバラバラのテーマを二つのグループに集約し、KCCの航海学の授業中に航海学受講生相手にプレゼンテーションを行った。筆者ら二名は、それぞれ原発についてと剣道について発表した。原発は、福島の件以来世界的な関心でもあったことや発表者の地元で原発があることから、原発について考えることを話した。一方、剣道も筆者の一人が、小さいときから行っており、ハワイの人たちに日本的なものとして、礼儀を重んじる武道を紹介した。それぞれ関心を持って聴いてくれたと思う。

また、KCCの日本語クラスに参加して、日本語を学ぶ学生達とそれぞれ英語と日本語で交流した。航海術にしても、英語は我々が、苦手であったが、航海学については我々の方が理解しており、授業中につたない英語で教えたりもした。このように、ハワイのことなど一方的に学ぶばかりでなく、我々の文化や勉強もともにいき、相互に学び合った。

また、宿泊のホテルはコンドミニウムタイプで、食事は、当番制で全員が担当した。ここでも協力し合い、また他の当番よりおいしいものを作ろうという競争もあり、他校の学生ともより仲良くなった。このように1日中プログラムを行っている感じであった。



図2 航海学の授業



図3 双胴カヌー「ナマホエ」



図4 日本語クラスの学生達



図5 オーシャントレーニング

3.2 ハワイ島及びオアフ島でのプログラム

ハワイ島では、3泊4日のクルートレーニングが行われた。1グループ約25名で3グループにて行った。トレーニングとしては、カヌーセーリング、航海術、セーフティトレーニングそして歌とプロトコールであった。それまでのカウアイ島のホテルでの宿泊と異なり、図6の写真に示すような屋外での寝袋生活であった。参加者もKCCの学生だけでなく、様々なところから100人近い人々が集まったプログラムであった。カウアイ島で学んだ航海学やハワイ語をハワイ島でのプログラムで実際に使うということであった。また、オーシャントレーニングだけでなく、歌や踊りを通じてハワイ文化を目の当たりにし、異文化を感じられた。

本プログラムの最終日はオアフ島に移動しての見学研修であった。ここでは、当初予定にはなかったが、筆者の一人がどうしても行きたかった場所があり、そこに見学に行くこととなった。その場所が、「えひめ丸」の慰霊碑である。「えひめ丸」は、愛媛県立宇和島水産高校の練習船であり、2001年にアメリカ海軍の原子力潜水艦に衝突された。その事故により、多くの生徒や教員が亡くなった悲しい事故であった。

筆者の一人は、これから海の仕事を志すものとして、地元の間人としてどうしても訪ねたかった場所であり、他の学生にも知ってほしい事故であった。この場所を訪れたことで、より一層安全への思いを強くし、自らも航海士となったときに、安全第一を心がけなければならないという思いを強く感じた。このインターンシップで忘れることのできない見学であった。



図6 ハワイ島での研修場所



図7 クルートレーニングメンバー

4. 報告会

インターンシップを終え、帰国後に商船学科1～3年生を対象に本校アセンブリホールにて報告会を行った。学生118名と関係教員9名の参加があった。はじめに、引率教員から概要を説明し、その後、参加学生の二人がそれぞれカウアイ島での研修とハワイ島での研修について、それぞれのプログラムの説明と感想を述べた。講演の最後に最終日のホノルルで訪れた「えひめ丸」の慰霊碑訪問についても語り、船や海、そして安全についてしっかり考えてほしいと後輩達に伝えた。われわれ商船学科の学生は、いざれ船に乗る。その時は、安全への責任をしっかりと持たないといけないと伝えた。

報告会後には、3年生から来年のプログラムに是非とも参加したいと申し出があり、来年も継続していくことが、確信された。報告会は成功したと考える。



図8 報告会

5. その他の取り組み

鳥羽や大島商船高専は、KCCでの国際インターンシップの他に、シンガポールのシンガポール・マリタイム・アカデミー(SMA)でもプログラムを行っている。本校では、現在まで参加した学生はいない。また、同プログラムに今後参加する予定もない。現在は、KCCでの研修に参加するにとどまっている。

また、昨年度末に、本校の柳沢教員と大島商船高専の2名が、次の国際インターンの場所としてフィリピンのマリタイムアカデミーオブアジア・パシフィック(MAAP)に視察に行った。しかしながら、現地の治安の関係上、学生を送ることは難しいとの結論に至った。しかしながら、学生を現地に送ることはできなくても、MAAPとの協力関係は必要と考えた。そこで、上述の柳沢教員の協力により、今年度11月にMAAPより、教員を2名本校に招き、約2週間に本校商船学科の学生及び教員に講義などを行う予定である。

6. まとめ

本プロジェクトに参加して、ハワイの文化や英語にふれることができ、本当に有意義な3週間を過ごすことができた。また、他校の商船高専の学生とも親密になり、互いの学校の良さも見つめ直すきっかけとなった。是非ともこれからも多くの学生が、同じような経験をし、見聞を広め、英語に対する必要性や大切さを知り、学ぶ気持ちを培ってほしいと感じる。今回のインターンシップの経験が、参加学生の英語や勉強への意欲の向上に繋がり、筆者の一人は海技士試験(2級)の取得であり、またもう一人もインターンシップ以前より、クラス順位以上に確実に成績が向上していることが、本プロジェクトの成功の一つと考える。

謝辞

本国際インターンシッププログラムは、ALL SHOUSEN及び海事人材育成プロジェクトの支援によって行われたもので、富山高専の遠藤先生、保前先生、山本先生、大橋先生、勝島先生、鳥羽高専の石田先生、橋爪先生、KCCのブライアン先生、デニス先生、本校柳沢先生をはじめ関係者一同に対して、厚く感謝申し上げます。

参考文献

- [1] カウアイコミュニティカレッジと五高等専門学校の教育連携に向けた国際交流, 平成 23. 24 年度交流会報告書, P3, (2013)
- [2] 遠藤、河合、石田、岩崎、辰巳、多田、平成 25 年度高専フォーラム AP4-3-2, (2013)
- [3] 遠藤、河合、石田、岩崎、辰巳、村上、平成 25 年度高専フォーラム AP4-3-1, (2013)
- [4] 柳沢、清水、本木、平成 25 年度高専フォーラム AP4-3-1, (2013)
- [5] Imai, Ishida, Hashizume, Conference Report of NCEC 2011&2012. AP1-26, (2013)